

書面語言中指示性詞的使用

—台灣日語學習者的個案研究—

後藤晃*

摘要

本文分析了一個台灣日語學習者經常寫作的文章中發現的“非現場指示語”的特點。觀察到的一個主要特點是，隨著日語學習的深入，指示詞的使用量增加，但與此同時，不應該使用的了形指示詞的使用量也在增加。在目前的教育領域，有教授教導說，非現場指示語了形的作用是呈現說話者和聽話者之間的信息，但了形列在作文中不用，因為作者和讀者基本不可能共享信息。但是，當我審視實際的作文時，發現有些作文使用的是了形的指示語。而根據本文的分析，發現這些了形指示語是由於學習者母語的影響，也可能受到日語學習者在初級階段學習的現場指示概念的極大影響。

關鍵詞：指示詞、文脈指示、融合型、時間距離、心理距離

*世新大學日本語文學系講師

書き言葉に見られる指示詞の使用について —台湾人日本語学習者の作文を中心に—

後藤晃*

要旨

本稿は、台湾のある日本語学習者の作文資料をもとにその中に見られる非現場指示詞の特徴を分析したものである。そこから見られた大きな特徴の一つは、日本語学習が進むにつれて指示詞の使用頻度が増えるのだが、同時に本来使用されるべきではないア系の指示詞が使用されることである。現在の教育現場では、非現場指示詞ア系は、話し手と聞き手の共通情報を示すものとして提示する機能として使用するという教授はあっても、作文では書き手と読み手が情報を共有するということが基本的にありえないため、ア系は使用しないと教授する。しかし、実際の作文を調べてみると、その中からア系の指示詞が使用されていることが分かった。そして、本稿の分析によると、これらア系の指示詞は学習者の母語の影響によるもの、また、日本語学習者が初級段階で学習する現場指示の概念にも大きく影響を受けている可能性があるということが分かった。

キーワード：文脈指示、対立型、融合型、時間的距離、心理的距離

*世新大学日本語学科講師

1.はじめに

吉田（1980）は世界の言語の指示詞を分類して類型化した。そこから、最も広く認められている類型は2分型であるとし、代表的な言語に英語や中国語をあげた。次いで、日本語や韓国語、タイ語などにみられる3分型であると指摘した。

台湾人日本語学習者の母語は基本的に中国語である。母語の中国語指示詞は2分型で、目標言語である日本語指示詞は3分型であることを考えると、台湾人日本語学習者が日本語指示詞を学習する際、指示詞の体系が異なる点から日本語指示詞を理解することが容易でないことが推測される。実際に台湾人日本語学習者から次のような使用例をしばしば目にするがある。

（「高校生活」というテーマの作文で）

私は女子高校に勉強していたのです。あれは教会学校なので、厳しい規則がいっぱいありました（下線は筆者による）

現在の日本語教育では、日本語指示詞を指すものが話の現場に存在する「現場指示」と談話やテキストの中に出てくる「文脈指示（非現場指示）」の2項目に分けて指導する。作文などの文章における「文脈指示（非現場指示詞）」の導入では、「ア系」は使わないと指導するのが基本である。しかし、実際には上で示したように日本語学習者は文章内においても「ア系」指示詞を使用していることもあるし、「コ系」と「ソ系」の使用でネイティブ・スピーカーと異なる指示詞を使用していることもある。台湾人日本語学習者はどのような判断基準で母語とは異なる3分型の日本語指示詞を選択するのか、理解する必要がある。本稿では、日本語指導の現状、台湾人日本語学習者の母語である中国語指示詞などをふまえ、台湾人日本語学習者のテキスト内における日本語指示詞の原則を仮定した。その仮定を通して、台湾人日本語学習者の日本語指示詞の一端を明らかにしたい。

2.先行研究

2-1 語学的観点

佐久間（1951）では、これまでの体系をまとめ、「なわばり」という概念を用いた。それに対し、三上（1955）では、佐久間の3項の平面的な対立関係ではなく、2種2項対立の指示関係を唱えた。なわばり説や2種2項的な概念は、多くの研究者によって長く議論されてきたが、正保（1981）は、これまでの指

示詞の体系を集約した。佐久間のなわばり説と三上の2種2項対立の中間的立場をともいえる「対立型」と「融合型」へと発展させた。この概念は、現在の日本語教育で「現場指示」として、ほぼ定着しているといってもよい。

また、久野（1973）は文脈指示の「ア系」と「ソ系」の使い分けを論じ、文脈指示は話し手・聞き手がよく知っているか、知らないかによって決定されると述べた。その後黒田（1979）は、独り言の場合を用いて、久野に異論を唱えたが、久野の概念は、日本語教育の談話文脈指示においてはほぼ定着している。しかし、談話における文脈指示は、さらに研究が進み、堀口（1978）では、聞き手に関する概念を取り払い、指示詞の使い分けには聞き手は関係なく、使い分けの基準は話し手の気持ちであると指摘し、金水・田窪（1996）では、談話管理理論を提唱し、直示用法と文脈照応の統一的な説明を述べている。

現場指示、文脈指示ともに語学の観点からの指示詞研究は大きく発展してきていると言ってもいいが、ソ系の解釈で、現在でも十分な見解が出ていない。

2-2 中国語指示詞

中国語指示詞研究では讚井（1988）が、現場指示用法と文脈指示用法に分けて中国語の指示詞の検討を行なっている。この中で、「近い」、「遠い」という概念を加えて、中国語指示詞の原則は話し手領域や共通談話領域にある場合は「這」となり、それ以外は「那」となることと述べた。さらに、文脈指示詞でも「近い」「遠い」という概念を用いて、指示対象の存在位置が話し手から近いと「這」、遠いと「那」となると指摘した。中国語指示詞においても論ずることができる「遠近」という観点は、台湾人日本語学習者が日本語指示詞を判断する場合にも受け入れられやすいと考えられる。

2-3 習得的観点

1990年以前は学習者に見られる誤用の重要性が認識され誤用分析研究が行われた。酒井（1987）は中国人日本語学習者と韓国人日本語学習者の誤用文を抜き出し、指示詞の使い分けを調査し、学習者の誤用の要因には、学習者の通則と異なる独自の原則や誤った解釈があるためだとした。その後、第二言語学習者による特有の言語体系の存在が主張されるようになると、次第に日本語学習者の習得研究が行われるようになった。長友（1998:80）が「日本語の習得研究が歴史的に開花し、独自の研究史を形成してくのは1990年代に入ってから」と指摘した通り、多くの習得研究がなされてきた。研究分野も発話、聴解、作文、読解など四技能全てにわたり、またストラテジー¹やインターアクション

¹ 学習者が学習言語を習得するために使うテクニックや工夫。ストラテジーには、理解・記憶・練習・定着に関するものや、学習環境・学習動機や意欲に関するものなどがある。

ン²能力などにも研究範囲は拡大し、細分化されてきた。なかでも文法に関する習得研究は多岐にわたっている。

日本語指示詞の習得研究では、迫田(1993)(1997)、上垣(1997)、安(1999)など横断的研究手法を中心に、日本語学習者の指示詞の使い分けや習得難度、習得順序などが論じられたものの、未だ統一的な結論に至っているとは言えないのが現状である。また、縦断的研究に焦点をおき日本語学習者の指示詞習得過程を長期的に観察して論じている研究については、管見であるが横断的研究以上に活発に論じられているとは言い難い。さらに、習得研究における対象者の多くは日本在住のJSL³環境下の日本語学習者が大多数であり、台湾で日本語学習をしているJFL⁴環境下の日本語学習者を対象としている縦断的研究という点でも論じられることは決して多くはない。

日本語学習者の誤用文だけを抽出し、考察するという点に関しては、誤用文だけで学習者の正しい習得過程が把握できるか問題ではあるが、導き出された結果として、学習者には独自の原則や誤った解釈という中間言語的な観点は、非常に興味深い点である。

日本語指示詞の研究において、横断的研究が多く論じられているなか、縦断的研究で成果をあげているのは迫田(1996)であろう。迫田は、韓国語母語話者と中国語母語話者という母語指示体系が違う日本語学習者を対象に、3年間の長期にわたるインタビュー調査を行なっている。そこから、正用の出現には一定の順序があること、誤用の消滅順序はソ系を使用する場合にア系を使用する誤用が消滅しにくいこと、そして、指示体系の違いにより誤用の消滅順序が違うということも明らかにした。

【表1】酒井(1987)・上垣(1997)・安(1999)

迫田(1993、1996、1997)による指示詞習得に関する研究

研究者	調査項目	対象者	調査法	主要な結果
酒井 (1987)	現場指示 文脈指示	JSL 中国人 32名 韓国人 24名 その他 43名	多岐選択問題、 質問、会話から 誤用を抽出	誤用原因の考察 学習者には通則と異なる独自の原則や通則の誤った解釈がある。

² 話し手と聞き手が互いに様々な情報を遣り取りすること。

³ JSL: Japanese as a Second Language の略。第二言語としての日本語の意。日本に住んでいる外国人が日本語を学習する場合には、これに該当する。

⁴ JFL: Japanese as a Foreign Language の略。外国語として日本語。台湾に住んでいる台湾人が学校教科や学問として日本語を学習する場合には、これに該当する。

研究者	調査項目	対象者	調査法	主要な結果
迫田 (1993)	レベル別、コソアの使用割合	JSL60名 初・中・上級、各20名 (各レベル)	インタビュー ／横断研究	初級：使用がほとんどない。 中級：どの指示詞も使用が増えるが、誤用・選択のゆれが多い。 上級：ソ系使用は増、誤用に近いア系は減少しない。
	母語指示詞体系別、コソア習得	に母語2項5名、3項5名) NS成人10名		2項：ソ系使用少ない 3項：ソ系使用多い 2・3項：誤用に近いア系は減少しない ・母語の正の転移の可能性あり ・ソとアの学習困難点はアの使い分けの難しさ
迫田 (1996)	正用の出現順序	JSL 韓国人3名 中国人3名	インタビュー (4ヶ月毎×3年)	コ系≧ソ系>ア系>観念CS
	誤用の消滅順序			中国語母語話者 ソ系エラー>観念CS>ア・コ系 韓国語母語話者 コ系エラー>ソ系>観念CS>ア系
上垣 (1997)	文脈指示	中・上級のJSL 英語10名 中国15名 韓国12名 他13名 NS25名	聴解による正誤判断テスト	母語に関わらず、話し手が持ち出した物事を再度指し示す場合に用いられる「ソ」の習得が困難である
安 (1999)	現場指示	韓国 JFL 初級183名 中級136名 上級89名 中国 JFL 初級61名 中級116名 上級139名	多岐選択問題	・相手の領域を指し示す方が習得困難 ・対立型のコ系は、話に答える方が習得困難 ・母語に関係なく、コ系とソ系の区分>ソ系とア系の区分で習得 ・対立型で相手の領域のソ系をア系で指し示す傾向がある

(表形式は森塚 (2002) を参照)

しかし、3年という長期的な調査をおこない学習者の日本語指示詞の習得過程を明らかにしたものの、対象者はJSL環境下の学習者に対するもので、JFL環境下の学習者については述べられておらず、台湾における台湾人日本語学習者の書き言葉の指示詞習得については未解明のとことが多い。

2-4 学習における指示詞

日本語指示詞は通常「現場指示」と「文脈指示（非現場指示）」に分けて指導を行う。現場指示詞に関してはかなり初期の段階で導入が行われ、「対立型（話し手に近いものは「コ」、聞き手に近いものは「ソ」、それ以外は「ア」で指す）」と「融合型（近くのもの「コ」、遠くのもの「ア」、どちらでもないものは「ソ」で指す）」を導入する。しかし、その後は日本語学習が進んでも、現場指示と同様に新たに文脈指示を学習項目として取り上げる教科書は少なく、現状では、文脈指示（非現場指示）の導入が十分にされているかどうかは不明確である。新村（1992）でも、日本語教育ではどの教科書でも例外なく現場指示用法は初級文法として扱うが、その後は、学習が進んでも指示詞の用法が体系的に扱われることはほとんどないと指摘している。

【表2】日本語現場指示

現場指示	対立型	話し手に近い	聞き手に近い	どちらにも遠い
		こ	そ	あ
	融合型	近くのもの	どちらでもないもの	遠くのもの
		こ	そ	あ

2-5 学習者の指示詞体系

ほとんどの学習者は現場指示詞を明示的に学習して以降は、指示詞の十分な導入がないまま文脈指示詞を使用していくことになる。その典型的なことの一つに、作文などの書くというタスク作業をあげることができる。作文では指示詞を文脈指示用法として使用する場合はあるはずである。しかし日本語文脈指示が未習の学習者は、文脈指示の体系を理解しないまま日本語指示詞として使い分けているのが実状であろう。

では、目標言語の指示体系を理解しないまま初級・中級・上級へと学習が進んだ場合、学習者はどうするのか。その場合、学習者は既習項目である日本語の現場指示と学習者自身の第一言語の指示詞体系を利用し、目標言語の未習部分を補完しようとすると考えられる。つまり、台湾人日本語学習者の場合、基本的に第一言語は中国語であるため、中国語の指示詞体系と日本語指示詞体系を使った学習者独自の指示詞体系を構築し、日本語学習に使用してしまうと仮定した。

「時間的指示」は、現在を「這」の範囲と考え「コ系」を、そして、過去と非過去は時間的に遠いとみなし、「那」の範囲である「ア系」を使用する。また、単純な回想や想像などは「ア系」が対応する。次に、既習である日本語からみた指示詞体系である。学習者は「現場指示（対立型、融合型）」を学習済みなので、その概念をほぼそのまま使用する。それらの点をふまえると、台湾人日本語学習者の独自の指示体系は次の表のようなものであろうと仮定した。

【表 3】 書き言葉における台湾人日本語学習者の日本語指示詞の使用原則の仮説

文脈指示	融合型を援用	先行詞距離・近	不確定な距離	先行詞距離・遠	回想・想像
		這	那	那	那
		こ	そ	あ	あ
	時間的指示	過去	現在	未来	
		那	這	那	
		そ(あ)	こ	そ(あ)	

台湾人日本語学習者がどの日本語指示詞を使用するか考える際、3つの点を考慮すると思われる。①指示対象がどの時間軸のものかで判断する時間的指示。②日本語現場指示詞の融合型を援用した実距離を基準にした判断基準。③書き手の心理的距離を基準にした判断基準。

3.研究目的

本稿では、学習者の日本語指示詞の学習状況、学習者の母語などをふまえ、JFL環境下の台湾時日本語学習者がテキスト内の指示詞をどのように選択するかを仮定した。その仮定を通して、JFL環境下における台湾人日本語学習者を長期的に観察する。これにより、日本語学習者の指示詞の使用実態を概観し、これまであまり論じられていない台湾人日本語学習者における日本語指示詞の使用原則という点を検証する。

4.検証

4-1 検証対象

台湾で日本語を学習している大学生1名を対象とした。この被験者は、高校1年次、高校でおよそ1年間、週に1時間の日本語学習経験がある。大学在学中は留学経験もなく、日本語学習においては完全にJFL環境下にあった。

4-2 検証範囲

LARP コーパスは、台湾人日本語学習者が大学に在籍していた期間、作文と対話形式のインタビューを収集した⁵コーパスである。本稿は、完全な JFL 環境下で学習した被験者 1 名を抽出し、およそ 1 年間（10 回分）の作文データを検証した。

【表 4】 調査時期と作文のテーマ

調査回	実施年月日	作文題目	学年
第 1 回	20040317	私の一日	1 年生
第 2 回	20040414	春休み	
第 3 回	20040505	私の部屋	
第 4 回	20040602	私の夢	
第 5 回	20040623	高校生活	
第 6 回	20040922	忘れられない出来事	2 年生
第 7 回	20041027	十年後の私	
第 8 回	20041124	もし一千万円があたったら	
第 9 回	20041208	大学生活に期待すること	
第 10 回	20050105	私と日本語の出会い	

4-3 検証方法

本稿で調査対象とする指示詞を設定した。日本語学習者が指示詞を学習する過程で学習対象になる指示詞を、庵、高梨、中西、山田（2000）の指示詞を参考に本稿の調査対象の指示詞にした。

【表 5】 本研究における対象指示詞

	コ（系統）	ソ（系統）	ア（系統）
名詞修飾	この	その	あの
属性	こんな	そんな	あんな
	このような	そのような	あのような
	こういう	そういう	ああいう
	こういった	そういった	ああいった

⁵ 台湾の大学は 1 年 2 学期制であり、9 月に新学期を迎え 6 月に終業を迎える。7 月、8 月は夏休み、2 月は冬休み期間に入るため、その期間内の収集は行われていない。

	コ (系統)	ソ (系統)	ア (系統)
	こうした	そうした	ああした
代名詞 (もの・こと)	これ (ら)	それ (ら)	あれ (ら)
代名詞 (人)	こいつ	そいつ	あいつ
代名詞 (場所)	ここ	そこ	あそこ
方向	こちら	そちら	あちら
	こっち	そっち	あっち
副詞	こう	そう	ああ

LARP コーパス内の被験者テキストデータより対象指示詞を使用している文、および先行詞を含んだ文を抽出した。筆者が立てた仮定である学習者の文脈指示の分類基準を通して、学習者の文脈指示の使用が仮説にそっているのか検証していく。

5. 検証結果

台湾日本語学習者は、日本語学習初期に学習した指示詞の現場指示用法である距離の概念を取り入れ、指示詞が指す指示対象を、①時間的指示、②実距離、③心理的距離の三要素から使用する指示詞を判断すると仮定した。そこで、この三要素から指示対象と指示詞の関係を検証した。

1 回目『私の1日』

【そんな】

昼、クラスメートと一緒に昼ご飯を食べます。ご飯を食べながらおしゃべりをします。そんな感覚はいいと思います。

- ・①現在でない「ソ系」、②実距離は「ソ系」、③心理的距離は「コ系」。

【これ】

毎日、だいたい五時半に家へ帰ります。そして家族と一緒に晩ご飯を食べます。私はいつも家族に学校のことを言います。これは平凡な幸せだと思います。

- ・①毎日行われる「コ系」、②実距離は「ソ系」、③心理的距離は「コ系」。

【それ】

…夜、だいたい十二時寝ます。それは私の一日です。

- ・①現在でない「ソ系」、②実距離は「ソ系」、③心理的距離は「コ系」。

2回目『春休み』

【そこで】

春休みの一日目、私は母校に帰りました。そこで担任の先生と地理学科の先生に会いました。

- ・①具体名詞なので、考慮しない。②実距離は「ソ系」、③心理的距離は考慮しない。

3回目『私の部屋』

【それは】

そして、私たちはよく地に本を置きます。だから、部屋はよくきたなそうです。それはよくないと思います。

- ・①先行詞は汚い部屋なので考慮せず、②実距離は「ソ系」、③心理的距離は考慮せず。

【そんな】

私はよく音楽を聞きながら勉強をします。私は勉強をしているときに音楽を聞くのが好きです。そんな感じはいいと思います。

- ・①今ではない「ソ系」、②実距離は「ソ系」、③心理的距離は「コ系」。

5回目『高校生活』

【この】

私は親友たちとW大学に入ると約束しました。この約束ができません。

- ・①時間的指示は「ソ系」、②実距離は考慮しない。③心理的距離は「コ系」。

【こんな】

親友たちはとても面白くて親切です。みんなと一緒に勉強をしたり、運動をしたり、おしゃべりをしたりしました。こんな気持ちがよかったです。

- ・①時間的指示は考慮しない。②実距離も考慮せず、③心理的距離「コ系」。

6回目『忘れられない出来事』

【その】

ある日、先生は「あなたたちはよく頑張っていますが、こんな程度はいい高校に入られません。」と言いました。だから、その日から、私達は土曜日も日曜日も学校へ行って、勉強をしていました。

・①時間的指示においては「ソ系」、②実距離は考慮せず、③心理的距離は、担任の発話なので「ソ系」。

【その】

だから、私達は毎日は宿題もテストもいっぱいあります。そのときはとてもつらいと思います。

・①時間的指示では「ソ系」、②実距離は「ソ系」、心理的距離は「ソ系」。

【あの】

今、私はよくあのときが思い出します。

・回想しているので「ア系」を選択。

【あの】

とても大変でしたが、クラスメートと一緒に勉強をしたり、おしゃべりをしたりしたのは楽しかったと思います。あのとき、なつかしいなあ。

・回想しているので「ア系」を選択。

7回目『10年後の私』

【あの】

十年後、私は成功的な人になりたいです。あのとき、私は必ずよく家族と海外旅行へ行きます。

・①時間的指示は、未来（10年後）であるので「ア系」、②実距離、心理的距離は考慮しない。

8回目『もし一千万円が当たったら』

【この】

私はいつもお金になりたいが、この夢は本当に起こったら、私はきっと不安になりました。

・①時間的指示は「いつも～」があるので「コ系」、②実距離は考慮せず、③心理的距離は「コ系」。

9 回目『大学生活に期待すること』

【この】

そして、こん学期から、わたしはダブルメジャーをしています。だから、私の大学生活は五年間です。この五年間、私は期待がたくさんあります。

- ・①時間的指示は現在であるので「コ系」、実距離は考えず、③心理的距離は「コ系」。

【それ】

英語が下手と、いい進学ができないし、いい就職もできません。だから、大学
のとき、私は英語も勉強しています。英語能力の証明書もとりたいです。それ
は私の期望です。

- ・①時間的指示は「～たい」の願望表現「ソ系」、②実距離では考慮せず、③心理的距離は「コ系」。

10 回目『私と日本語の出会い』

【その】

私の高校は第二外国語という授業があるから、高校生のとき、私は日本語を勉強して始めました。その授業は毎週二時間だけです。だから、私は五十音と
です、まず体だけを習ったので、高校二年生のとき、私はその授業をやめました。

- ・①時間的指示を考慮しない。②実距離も考慮しない。③心理的距離は、書き手の学習対象であるので「ソ系」を使用した。

6.まとめ

本稿では、台湾人日本語学習者が未習の文脈指示詞を使用するのは、母語の中国語指示詞の体系と既習した日本語指示詞の現場指示用法を組み合わせた体系を構築し、使用しているという仮定を立てた。そして、LARP コーパスのおよそ1年間のテキストデータ 10本を縦断的に検証した。

検証の結果、学習者はテキスト内で未習にも関わらず文脈指示用法を用い文章を組み立てていた。つまり、学習者は日本語指示詞の文脈指示用法を学習する以前に学習者自身で独自の指示詞体系をつくり、使用しているということになる。しかも、現場指示用法を学習した後、文脈指示を明確に学習にないという日本学習事情もある。これでは、日本語学習者は正しい日本語指示詞体系を

理解せず自らが構築した体系の使用を続け、上級者になっても正しく習得されない化石化の状態を作ってしまう要因にもなってしまふ。

今回、学習者の検証で明らかになった、学習者の日本語指示詞学習の実情を変えるためには、指導方法にまで目を向けて論ずる必要性があるのではないかと考える。

7.今後の課題

台湾人日本語学習者は、作文などを書く場合、初級段階であっても、文脈指示用法などを用いて、文章を書き上げている。日本語学習において未習であっても使用可能なのは、学習者自身の母語を利用して日本語指示詞体系を補完し、独自の指示詞体系を構築していることを明らかにした。しかし、今後は調査対象者の人数を増やすことで、この独自の体系をさらに明らかにしていきたい。

また、学習者が指示詞を効率よく学習できるよう、これまでの指導方法を見直すことも視野に入れ、教育現場に示唆できるようにしたい。

参考文献

- 佐久間鼎 (1951) 『現代日本語の表現と語法 (改訂版)』 東京:厚生閣 pp. 14-28
- 三上章 (1955) 『現代語法新説』 刀江出版;復刻 1972 くろしお出版
- 正保勇 (1981) 「『コソア』の体系」『日本語の指示詞』 国立国語研究所 pp. 51-122
- 久野章 (1973) 『日本文法研究』 大修館 pp. 185-189
- 黒田成幸 (1979) 「(コ)・ソ・アについて」, 『林栄一教授還暦記念論文集・英語と日本語と』 東京:くろしお出版 pp. 41-59
- 堀口和吉 (1978a) 「指示詞「コ・ソ・ア」考」『論集日本文学・日本語』 5号 角川書店 pp. 137-158
- 堀口和吉 (1978b) 「指示詞の表現性」『日本語・日本文化』 8号 大阪外語大学 pp. 23-44
- 讃井唯允 (1988) 「中国語指示代名詞の語用論的再検討」『人文学報』 (東京都立大学) Vol. 198 pp. 1-19
- 堀口和吉 (1990) 「指示詞コ・ソ・アの表現」『日本語学』 9巻 3月 明治書院 pp. 59-70
- 新村朋美 (1992) 「指示詞の習得」— 日英語の指示詞習得の対照研究— 『早稲田大学日本語研究所教育センター紀要』 4 pp. 36-59
- 安龍洙 (1996) 「韓国人学習者の指示詞「コ, ソ, ア」の習得における母語の影響について— 非現場指示の場合—」『東北大学文学部日本語学科論集』 6 pp. 1-13
- 金水・田窪 (1996) 「複数の心的領域による談話管理」『認知科学』 3 (3) : pp. 59-74
- 迫田久美子 (1993) 「話し言葉におけるコ・ソ・アの中間 言語研究」『日本語教育』 81 日本語教育学会 pp. 67-80
- 迫田久美子 (1997b) 「日本語学習者における指示詞ソとアの使い分けに関する研究」『第二言としての日本語の習得研究』 第二言語習得研究会 pp. 57-70
- 迫田久美子 (1998) 『中間言語研究—日本語学習者による指示詞コ・ソ・アの習得』 溪水社
- 長友和彦 (1998) 「第二言語としての日本語の習得研究」『児童心理学の進歩 1998年版』 pp. 79-110
- 上垣康与 (1997) 日本語学習者の指示詞使用: 文脈指示のコ・ソ・アの選択 『九大留学生センター紀要』 pp. 27-40

庵功雄、高梨信乃、中西久美子、山田敏弘著（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』松岡宏監修 スリーエーネットワーク pp. 2-15

庵功雄、高梨信乃、中西久美子、山田敏弘著（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』松岡宏監修 スリーエーネットワーク pp. 2-13

沖森卓也、蘇紅（2014）『日本語ライブラリー 中国語と日本語』朝倉書店 pp. 2-7